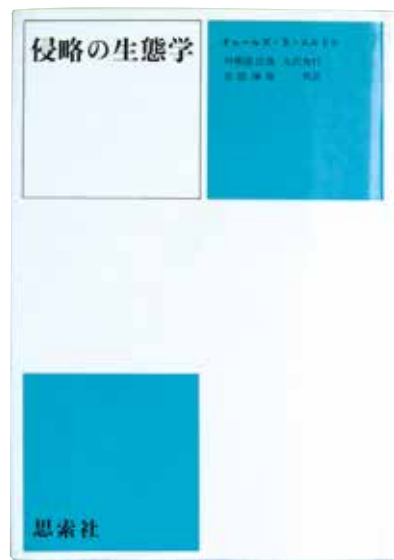




Books 案内

## 侵略の生態学

チャールズ・S・エルトン 著  
 川那部浩哉・大沢秀行・安部琢哉 訳  
 思索社 1971 223頁  
 2,200円 (\*絶版：図書館等でご覧ください。)



## 多様な生物が生きる自然は、侵入生物を制御する

### 生物の侵入に強い自然と社会を考えるヒント

1958年出版の本書は、外来生物問題を扱った古典的名著です。今回、この本を紹介するのは、新たな生物の侵入に強い(レジリアンスの高い)自然や社会のあり方について、今でも多くの示唆を与えてくれていると感じるからです。

### ある生物が異常に増える生態的爆発

地球上の生命体はすべて、他の複数の生命体に依存し維持されています。その連鎖のバランスは、新たな生命体の侵入によって一時的に小さな混乱を起こしますが、しだいに収束し新しいバランスを生み出します。この侵入と新しいバランスはこれまで幾度となく繰り返してきたことですが、産業革命以降はそれまでとは異なり、世界史的に見て「自然の中に恐るべき混乱を巻き起こしている」とエルトンは指摘します。

「今日私たちの地球は、まさに爆発しやすい状況にある。」とエルトンは言います。「生態的爆発—これはある種の生物の数が異常に増えることを意味する。インフルエンザのような流行性のウイルス、線ペストのような細菌、ジャガイモ疫病のような菌類の場合もあれば、ウチワサボテンといった緑色植物や、ハイイロリスのような動物」など多様な生命体が引き起こしてきました。

#### 著者紹介

チャールズ・サザーランド・エルトン

Charles Sutherland Elton

1900年3月29日—1991年5月1日

20世紀のイギリスの動物生態学者。オクスフォード大学で研究と教育に従事。動物間の食べ物を介したつながり食物連鎖などの概念を提唱した。本書は、外来生物を生態学の問題として扱い、以後の外来生物研究に大きな影響を与えた。翻訳著書は他に『動物の生態学』『動物群集の様式』など。いずれも絶版

### 爆発制御は自然の力が頼り

侵入生物の“爆発の力を弱める”方法として、エルトンは「豊かな自然群集に満ちた本当の“野生の状態”」を保存する必要性を強調します。爆発の制御は“人為的”な方法だけでできることではなく「自然の力を借りねばならない」のです。

もちろん人為的な防除は重要ですが、広い中長期の視野を持ち自然の力に頼ることが必要です。

### 本書の構成～各章の紹介

本書は9章から成ります。第1章「侵略者」では、菌や動植物7種の事例を紹介します。第2章「ウオレスの世界」では、在来種の分布について、第3～5章では多数の侵略事例を紹介し、第6章「個体群どうしのバランス」では「本当の恒久的な制御」は“人為的”な方法だけでできるものではないと主張します。第7章「古い食物連鎖と新しい食物連鎖」では、人為的な生物導入の危険性や農薬の弊害を指摘し、第8章「自然保護をする理由」第9章「多様性を保護せよ」では、生物多様性が生命体の侵入に抵抗力をもった地域の基盤になる、と説いています。その典型例が、「本当の“野生の状態”」が維持されている伝統的な里山景観である、と述べています。

### 本当の“野生の状態”が侵入生物を制御する

私たちの身体は地域の自然の一部です。私たちを含む地域の生命体は相互に周囲を環境とし、一体となって自然景観を形づくっています。地域の自然を“野生の状態”として維持することが、侵入者への抵抗力になる。これからの地域づくりでは、このエルトンの指摘をあらためて噛みしめてみる価値があるように思います。  
 (陸 斎 / 自然環境部)